

聖書：マタイ 10：5～15

説教題：神の国の大使

日時：2019年3月17日（朝拝）

9章35節からマタイの福音書は新しい段階に入っています。これまではイエス様お一人が活動して来られましたが、9章35節からは弟子たちも神の国のために働く者とされます。そのきっかけは36節に記されていたように、群衆が羊飼いのいない羊の群れのように弱り果てて倒れている姿をイエス様をご覧になったことでした。そこでイエス様は弟子たちに言われました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主にご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」そして10章1～4節で12使徒が選任されました。その彼らが初めて福音宣教に遣わされる際にイエス様がお語りになった言葉が今日これから見る言葉です。これはこの章終わりの42節まで続きます。ここを数回に分けて見て行きます。

さてここを読むにあたって押さえておきたいことは、ここにあるのは福音宣教をする者にとっての恒久的ルールではないということです。そのことは最初の5節に明らかです。そこに「異邦人の道に行ってははいけません。また、サマリア人の町に入ってははいけません。」とあります。これが永遠のルールでないことは明らかですね。このマタイの福音書の最後は、「全世界に出て行って、あらゆる国の人々に福音を宣べ伝えよ」といういわゆる大宣教命令で締め括られています。聖書の色々な箇所を読んで分かることは、全世界への福音宣教は聖書の一番最初の創世記から計画されていたことでしたが、実際にはイエス様の十字架と復活を経て初めて導かれて行くということです。それまでの間は、イエス様の地上の生涯の間じゅう、まずユダヤ人に焦点が当てられていました。ですからこの10章の言葉は、そういうある特別な期間において語られた言葉として見て行かなければなりません。またこの時の弟子たちの派遣は彼らにとって第1回目の派遣であり、ショートトリップすなわち短期間の宣教旅行です。そういう事情に特有の事柄も含まれています。しかしもちろんそこにはいつの時代にも当てはまる大切な原則も語られています。私たちはそれを適切に読み取って、自分に適用して行く必要があります。

まず宣べ伝えるべきメッセージが7～8節にあります。7節に「行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。」とあります。これは4章17節で見たイエス様の公の生涯における第一声と根本的に同じです。4章17節：「この時からイエスは宣教を開始し、

『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言われた。」 天の御国とは神の国のことであり、神の国とは神のご支配、もう少し言葉を補えば神の恵み深いご支配のことです。その神の恵みの支配が近づいたとは、近づいたがまだここには来ていないという意味ではなく、ここに到来し始めているという意味です。そう言える根拠は何でしょうか。それはイエス様が来られたことです。本来、この世界は神が造られた良い世界でしたが、人間が罪を犯し、神のもとからさまよい出たことによって、人間は罪の呪いの下で生きる者、またサタンの支配下にある者となりました。そのため、この世には様々な苦しみが満ちています。しかしイエス様は神の恵み深い支配にもう一度私たちを生かすために来てくださいました。どうしてイエス様にそれができるのでしょうか。それはイエス様が私たちの代わりに十字架について、私たちの罪が払うべき代償を代わりに全部払ってくださるからです。それによって罪の問題が解決され、サタンの支配は打ち破られ、信じる者は神の恵み深い支配に生かされるようになる。この祝福が完全な形で現れるのはサタンが滅ぼされる最後の日で、それまでサタンの支配はこの世に存在し続けますが、イエス様の到来とともに神の恵みの支配はこの世に突入しているというのが聖書のメッセージです。

その神の支配の見える現れとして様々ないやしが行われました。8節に記されていることは、これまでイエス様がしてきたみわざそのものです。病人をいやし、死人を生き返らせ、ツァラアトに冒された者をきよめ、悪霊どもを追い出す。これはある一定の期間、特別に弟子たちに与えられた権威です。こうして彼らはまるでイエス様がそこにいるかのようにイエス様の働きを担う者とされました。

8節最後に「あなたがたはただで受けたのですから、ただで与えなさい。」とあります。彼らは特別な権威を与えられましたが、それで商売をするようなことをしてはならないということです。癒す代わりに見返りを求めるようなことをしてはならない。自分たちはただでもらった。すなわちただ恵みによって生かされている。だから神にそうしていただいたように他の人にもそうせよ、とされています。

さて9～10節は伝道者の生活に関する心得です。ここでイエス様は、お金を持って行くな、2枚目の下着も持って行くなと言います。替えの下着を持って行かなかったらどうなるのか。毎日同じものを着たら臭くなるのでは？などと私たちは心配してしまいます。ちなみにここで言う下着とは上着の下に着る物、すなわちそれ一枚で着ても良いシ

ヤツのようなもののことです。だとしても2枚目がなかったら不潔な人にならないかと思ひます。しかしこれもこの時の状況を考慮すべきだと思ひます。これは先に述べたようにショートトリップです。また湿気が多い日本と違つて、この地方の人々は当時必ずしも毎日着替えたわけではなかつたでしょう。また泊まる宿について言えば、ユダヤ人の間ではもてなしが美德でした。今日のような安心して泊まれるホテルがなかつたこともあり、旅人を迎え入れ、宿泊させることは一般的な慣習でした。そういう時代背景・宗教的背景も考えに入れるべきでしょう。しかし大事な原則は同じです。それは必要以上持つな！ということです。私たちはつい生活についての心配を先にしてしまい、そのことに多く気がとられやすいものです。出かけるためにはあれも必要、これも必要。もしこれこれこういうことが起こつた時のためにこれも必要。万が一のためにあれもこれも、もう一つずつ、等々。それらのことに多くの関心が奪われるようであつてはならない。私たちが立つべき原則は前に見た6章33節です。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」第一にすべきことを第一にして取り組むなら、あとの必要は神がすべて備えてくださる。だからあれやこれやのことに心を捕らわれず、一つのこと集中していけば良い。ここにももちろん信仰の戦いがあります。本当にそんなことで大丈夫だろうか。しかしここで疑つてゐるようでは神の国を信じてゐることにはなりません。他の人に神の恵み深いご支配がここに來ていますよ〜と宣べ伝えておきながら、自分自身がそれを信じていない、またそこに生きていないということになってしまいます。しかしこのイエス様の言葉はただ色々持つて行くな！という厳しい制限なのではありません。これはあなたが先に心配しなくても神があなたの生活を守つてくださるという約束です。だからその神の摂理を信じて進みなさい！という励ましです。その理由として10節後半に「働く者が食べ物を得るのは当然だからです。」とあります。Iコリント9章14節：「同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。」働いた人が、その働きから糧を得るのは当然のこととされています。その当然のことが当然に起こるよう神が導いてくださる。どのようにしてそうなるのかは必ずしも前もつては分かりません。しかしこの世界を支配してゐる神が必ずそのようにしてくださることに信頼して、自分のなすべきことに専心没頭せよ！とされているわけです。私たちは自分自身がそのように生きる中で、「神の国は近づいた！」「それは今ここに到來し始めている！」という喜びの知らせを身をもって伝えて行くことができるのです。

11節以降には、入つて行つた町や村でどのようにすべきかということが語られていま

す。11 節に「どの町や村に入っても、そこでだれがふさわしい人かをよく調べ、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい」とあります。ふさわしい人とは、13 節以降から、福音を受け入れ、福音を語る者たちを歓迎してくれる人のことだと分かります。その人のところにとどまれ！とは、おそらく他の家と比べてもっと良い条件の家があっても、そっちに移るといようなことをしてはならない！という意味でしょう。そのふさわしい人の見分け方について 12 節に「その家に入るときには、平安を祈るあいさつをなさい」とあります。もしその家がふさわしければ、あなたがたの祈る平安がその家に来るようにせよ。これはどういうことでしょうか。ご存知の通り、ユダヤ人のヘブル語の挨拶はシャロームというもので、これは「平安があなたにあるように」という意味の挨拶です。そして聖書における平安と平和と同じ言葉で、それは第一に神との平和を意味します。ですから平安とは神との平和に基づく平安のことです。そしてこれはイエス様を通して初めて真に私たちの上に実現する祝福です。イエス様の十字架を通して、私たちの罪は神の前で赦され、神との真の平和の関係、平安を持つことができます。この時はまだ十字架が行われていない時ですから、そこまでのことを伝える方も伝えられる方もはっきり分かっていたわけではなかったでしょう。しかし弟子たちはイエス様の弟子たちとして平安を祈る挨拶をします。それを受け入れる人たちも、イエス様を受け入れ、信じる人たちです。そういう家にはイエス様がもたらす平安が支配することになるのです。

一方で受け入れない家もあります。その時、どうするか。14 節に「その家や町を出て行くときに足のちりを払い落とさなさい。」とあります。これは当時のユダヤ人の習慣に基づく行為です。ユダヤ人は異邦人の地域を通してユダヤ人の地に戻って来る際、その境界線上でこのような行ないをしました。それは足の裏についているちりでさえ、神を信じる私たちと、そうでないあなたがたの間には一切関係がないということ表す象徴的行為でした。それを異邦人に対してではなく、ユダヤ人に対してするのです。すなわちあなたがたはユダヤ人であっても霊的な意味では異邦人であるという宣言です。15 節：「まことに、あなたがたに言います。さばきの日には、ソドムとゴモラの地のほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。」ソドムとゴモラは、創世記 19 章で、その不道德のゆえに天から硫黄の火が下ってさばかれた町です。あのソドムとゴモラの方が、まださばきの日には罰が軽い。反対から言えば、イエス様の弟子たちを受け入れず、その言葉に耳を傾けなかった町々の方がさばきの日にはもっと罰が重い。これは二つのことを私たちに教えています。一つはイエス様を拒否することはそれほど重大なこ

とであるということです。原則的に言えば、恵みが大きければ大きいほど、それを無下に扱い、退ける者の責任は重い。そういう意味で私たちが福音に接していることは大変なことでもあるわけです。ここまではっきり示されたことを退けるなら、そうでなかった人に比べて、その人が刈り取るさばきは大きい。私たちはそういう福音の前に立たされていることを覚えて、自分の応答を良く考えなければなりません。そしてもう一つは、弟子たちに対して人々が取った態度が、その人の永遠の運命を決定するということです。弟子たちはそれほどの権威をもって遣わされているのです。とりあえず行って来なさい、ダメだったら後からイエス様が行くからという形で遣わされているではありません。彼らはイエス様の代理人です。後に 40 節で「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れるのです」と言われる通りです。そのような権威をもって、使徒たちは遣わされるのです。

この続きは来週見たいと思います。私たちが心に留めたいことは、これは 12 使徒にだけ当てはまる教えではないということです。ルカの福音書を見ると、12 弟子を遣わした後、イエス様は 70 人を遣わしたことが書かれてあります。さらにこのマタイの福音書の最後には世々の教会に対する大宣教命令があります。イエス様は 12 使徒ばかりでなく、主を信じ、主と共に歩む私たち一人一人も神の国の大使またキリストの使節として派遣しておられます。そういう私たちにとって今日の箇所から学ぶ大切なことは、私たち自身が天の御国、神の国のリアリティーに生きているということです。人に宣べ伝えておきながら自分自身がそこに生きていないようなら話にならない。神はイエス様を遣わし、その方の十字架を通して、私たちの上にあった罪の支配、サタンの支配を打ち壊し、恵みのご支配に導き入れてくださいました。私たちの罪を赦し、私たちを受け入れ、神の子どもとし、天の御国に入るまで守り、導いてくださっています。地上ではなお色々な出来事が起こりますが、神はそれらすべてを私たちの益となるように用いて私たちを聖め造り変え、栄光の状態まで導いてくださる。そのことを信じる私たちが召されている生き方は、神の国と神の義をまず第一に求める生活です。一見厳しい生き方ようですが、実はそうではありません。私たちはただそのことに関心を集中して行けば良いのです。そうすればあとは神が必要なものをみな備えてくださる。自分であれこれ心配したり、思い煩ったりする必要はない。恵みの支配の手を広げていてくださる神に信頼して、本当に大切なこと、神がしなさい！と言っていることに専心没頭すれば良い。これこそあらゆる心配から解放され、希望で満たされる道です。天の御国のリアリティーにいよいよ豊かに生きる道です。日々神を喜び、神との交わりの中で守られる幸いな

歩みです。私たちは自分自身がこの幸いに生きることによって、人々に天の御国が近づいた！と宣べ伝える者でありたい。自分自身が神の平安をいただいている者として、その平安が人々に広がって行くように祈る生活へ進みたい。私たちがそのように歩んでも、イエス様が言われたように、受け入れない人、拒絶する人もいます。しかしそれでも私たちはイエス様によって立てられている神の国の大使です。そのことに勇気づけられて、主とともに、主の御国を広げる主の弟子の歩みへと今週も遣わされて行きたいと思いません。